

プロポーザル最終審査講評

<総評>

墨田区民の誇りであり墨田区を生誕地とする世界的な画家である葛飾北斎の業績を展示・研究する北斎館（仮称）は、北斎の顕彰を通じて地域に愛着を深める場であるとともに、区民の生涯学習の場、地域活性化の拠点、国内外に向けての情報発信と交流の場として位置づけられる文化施設である。こうした様々な役割が期待される北斎館の設計プロポーザルに対して 176 者からの提案書の応募があった。

多くの提案は、北斎館の施設整備方針及び本プロポーザルの要項を真正面で受け止めるとともに、北斎及びその作品を入念に調べたうえで、新しい美術館の在り方を積極的に提案したものであり、一者一者のプロポーザルに投入したエネルギーと熱い思いが伝わってきた。提案内容は、敷地の条件がタイトであることから要求された機能を積層させ複合的機能のメリットを垂直方向の空間構成の中で巧みに引き出そうとしたもの、ガラスなどの単純なボックス状の建物にニュートラルな展示空間を入れ子状に配したもの、北斎という特定の作家とその作品を展示する美術館ということで、版画や北斎の作品をデフォルメして建物そのものに表現しようとしたもの、和風の形態や材料により北斎の美術館のイメージを表現しようとしたもの、まちづくりの観点から周辺地区の活性化に寄与する公的な美術館の新しい姿を提案しようとしたもの、まちの新しいランドマークとして造形的な建築形態を提案したものなど、極めて多岐に渡っていた。

第1次審査においては、北斎館の施設整備方針及び本プロポーザルの要項で求めた提案事項へのバランスのとれた対応と施設の設計理念の評価に加えて、異なるアプローチを代表する提案の 10 者を選定した。

第2次審査（最終審査）では、公開プレゼンテーションにおいて示された展示空間を含む複合的な導入機能への対処と敷地固有の条件への配慮とともに、新しい時代における北斎という特定の画家のための美術館に対する独創的な設計理念と期待される地元地域への貢献を評価し、妹島和世氏を最優秀者とし、北川原温氏と北山恒氏は優劣つけ難かったが、投票の結果、北山恒氏を次点者とした。

<最優秀者>

○妹島 和世 案

折り紙のように見えると指摘した審査委員がいたが、見る場所や角度によって様々な表情を見せる幾つかの小さな建物が合体したような特徴的な形態の建物は、下町市街地のスケール感とも調和しつつも、街の新しいシンボルとなることが期待できる、従来の公共建築にない新しさ、可能性を感じる建物である。

建物の壁面は、建物周辺の公園の緑や街の風景を優しく映し込むことで、街の風景に溶け込むことが意図されている。建物を小さな単位に分割するように立体的に設けられた幾つかの楔状くさびのスリットからは、美術館という特殊な内部空間にコントロールされた光を取り入れ

るとともに、建物内と外部の視覚的な繋がりを実現している。また、公園に向けて1階部分に配置されたエントランス周辺には、人々が気楽に施設に立ち寄りまた滞留できる工夫があり、施設の街への開き方が絶妙なバランスで提案されている。建築の形態だけで強くその存在を主張するのではなく、低層階での人々のアクティビティを生む設えや、外壁の金属パネルによる周辺の風景の映し込みや建築内のアクティビティを楔状のスリットを通して表出させることで街とのつながりを持たせようとする、この場所の在り方を体現した公共建築へのアプローチを高く評価し、本プロポーザルの最優秀者とする。

展示室について、スリット状の開口部や不整形の平面により、展示がし難いのではないかという指摘もあったが、今後展示のサブシステムを検討する中で、建物の形状を活かしつつ十分に解決できる提案者であると判断した。

<次点者>

○北山 恒 案

周辺に対してオープンなつくりのピロティの上に、木製ルーバーを組み込んだガラスファサードのボックスを配し、そのボックスの中に入れ子状に企画展示室を設け、さらにその外周に外部に面して道行きと呼ぶ回遊経路で、複製芸術である版画の特徴を活かした様々な展示手法で見せる常設展示空間を設けた明快な空間構成の提案である。人々が自由に立ち寄ることの出来るピロティ空間が、イベントなどを通して公園や周辺の高架下マーケット、そして区立図書館と繋がりを持つとするまちづくりへの展開は、施設の地域活性化拠点の可能性を示すものである。

校倉造りのような和を感じさせる回転木ルーバーを組み込んだ全面ガラスファサードの建物は、まちの人々に親しまれるランドマークとしての魅力を感じるが、一方で、木製ルーバーを多用した建築が増えている昨今の建築状況において、建物としての新鮮みに欠けることは否めない。また、環境制御機能を有する回転木ルーバーは、経費的にもメンテナンス的にも、提案された機能が安定的に維持できるかどうか疑問が残る。

<佳作（第一次審査通過者）>（応募受付順）

○澤岡 清秀 案

「黄金比と江戸小紋の玉手箱」と題しているように、建物配置から建物の平面や立面に至るまで、北斎の絵の構図を決定した黄金比という幾何学の原理を徹底して導入した建物である。江戸小紋をモチーフとしたPC板の寄せ木細工のような建物のファサードにおいても、正方形と黄金矩形の分割が用いられており、古典的ではあるが非常に理詰めの設計手法による提案である。ただここまで徹底した黄金比に対する拘りにどのような意味があるのかという疑問も残る。

また、建築内部の空間構成においても施設の整備方針に極めて忠実な提案となっているた

め、手堅いが、反面堅さが感じられる色気の少ないインスティチュショナルなイメージの建物となっている。提案者は、北斎館の第一義的な機能として北斎の研究センターを挙げていることから、意図的であることが想像されるが、セキュリティなどの理由からカフェを除き建物自体が外部に対して非常に閉じた印象であり、加えて防災対策として地盤面より1 m 近く高い^{きだん}基壇の上に建物の1層レベルを設定していることなどから、周辺との繋がりが希薄であり、まちづくりという視点からは疑問が残った。

○奥野 公章 案

提案パネルからは、外皮を外した抽象的な模型表現であったこともあり、透明感のある外皮の中に浮島のように設けられた企画展示ガーデンと常設展示ガーデン、そしてエントランスガーデンという積層されたガーデンというコンセプトが、極めて冒険的な美術館の提案として期待を持たせた。しかし、プレゼンテーションにおいて構造的に成立することは説明されたが、その結果、提案者がいうような半透過性の薄い有孔パネルにより柔らかくて優しい光に包まれた空間というものが、技術的にも実現可能なものであるか、最後まで確信が持てないものであった。また、壁展示に頼らない平置きの展示や光の差し込む展示空間など、版画の展示についてどこまで配慮されたものか、という疑問も残った。

○室伏 次郎 案

北斎館の建物が地域の精神的なランドマークとなるように親しみやすさのある単純明快で象徴的なキュービックな形態の建物を提案している。北斎画を、^{きかがく}幾何学で表す世界観と大胆な表現と捉え、花びらを模した伝統ガラス工芸である「江戸切り子」のモチーフをダブルスキン内の^{がいかく}外殻構造で表現しているところが建物外観の際立った特徴である。奥行き1 m幅のガラスの二重構造はかなり頑強なイメージで、周辺からの視認性は高いが、力技でデザインが強過ぎる印象は否めない。1階に北斎路地と呼ばれる動線空間を配置しているが、ガラスの透過性の高い建物にも拘わらず、建物全体としては閉鎖的な印象で、周辺の街との関係が希薄なのが気になる。

○柳澤 潤 案

北斎が生きた活気あふれる時代の空気を想像することのできる地域活性化装置としての建築を提案しているところに特徴がある。北斎館を中心に、街中に北斎ギャラリーと呼ばれるギャラリーを点在させ、それをネットワーク化するアイデアは、今後のまちづくりへの展開方法の一つとして評価できる。

一方、建物内部は、大きくインナーギャラリーとアウターギャラリーの2つのギャラリーからなり、それぞれ江戸時代の庶民の生き活きとした生活空間を想像させる、多様で高密度な小さな単位の内部空間により構成されている。しかし、小さな箱状の空間による構成は、自由で柔軟な展示の妨げとなる可能性があるとともに、管理上も困難が伴うことが予想され、

空間のおもしろさは評価できるが、展示機能上での制約が現実の大きな問題である。

○新関 謙一郎 案

北斎館を国際文化都市としての墨田区における文化交流拠点として、不動な象徴的存在の建物を創出すべく、建築を平面的に四つ葉状に4つのボリュームに分割し、4周に曲面の壁の表情を持つモニュメンタルな造形として建物を提案している。街のスケールに配慮し、曲面のある造形により親しみやすい外観を意図したとしているが、外部に対して殆ど開口部のない閉鎖的な建物は、その圧倒的なボリュームとも相俟^{あいま}って、周辺環境から隔絶されたモニュメントという印象は否めない。

また内部空間については、大まかなゾーニング程度で、展示室を含め十分な検討がなされていない印象がある。

○石黒 由紀 案

宝箱と呼ぶ、図書室書庫、企画展示室、収蔵庫や学芸員等の活動の場の3つの直方体の閉じた空間と、ボイドと呼ぶ全体を把握できるエントランスホールと常設展示を繋ぐ開放的で気持ちの良い吹き抜け空間によって構成される建物である。明快なゾーニングと空間構成により、全体としてまとまりがあり、洗練されたデザインの建物の提案である。

一方で、都市的で洗練されたガラスボックスの建物は、余り新しさがなく、場所に対する強いメッセージが感じられない。また、建物と公園の間に配された池を渡る橋から入り口へのアプローチは提案の特徴の一つであるが、結果として施設を閉鎖的なものになっているように思われる。

○小川 晋一 案

公園に面したエントランスホールと多目的ホールから成る低層部と、積層された展示空間と図書機能、カフェなどをスロープで繋ぐ高層部により構成された、長方形のシンプルな形態を、北斎画を抽象化した透過ガラスのファサードで包んだガラスボックスの美しい建物である。一方、可動式のスクリーンパネルにより調光可能としているが、外光が入る展示空間を含め全面ガラスとする説得力がない。モジュールにこだわり過ぎている感がある。展示空間の設えやまちとの関わりなど、空間の利用や活動の側面からの検討が十分でなく、ハード面の建築のみの印象である。

○北川原 温 案

緑町公園と周縁の街路全体を「現代の広小路」として捉え、広小路の中に建つ北斎館の敷地の1階部分に辻空間＝「つじポケット」を配置し、ここを人々の自由な活動拠点として、北斎館を中心にイベントなどの活動を通して地域全体の持続的な活性化を図ろうとする提案であり、地区固有の新しい美術館像として評価できる。

建物自体は、3～4階の展示・収蔵ゾーンと1～2階の辻ポケット、ライブラリーポケッ

トに立体的に区分されており、空間構成のコンセプトも明快である。建物の外観は、開放的な低層階の上に3～4階を包むベルリアンブルーに塗られた無窓のキャップ状の大屋根が置かれているのが特徴であり、雑然とした街の風景の中に存在感のあるランドマークとしての建物が立ち上がっている。こうしたランドマークとしての建物のあり方も、この場所における一つの選択肢であるように思われる。

一方で、ホワイトキューブとして設けられた展示空間とそれに隣接するホワイト空間について、下層階との繋がりなど、内部空間としてももう少し積極的な提案があっても良かったのではないだろうか。